

經典餘師

論語一

二行



三行

11

1029

2



論語朱熹集註

本文は字而の二字ありて、篇
の名とすと以下にも例あり

子曰學而時習之不亦說乎

學而第一
子曰のたまふ「よらんくあはくまゐるをてんにしてときにえとなり習
まうこころをさし亦説やび不人乎」

子曰はもて聖人の御語なり以下此例にまづべしとまじ
 学問の道更よゆと事なりたとへば鳥の始て飛たると
 如く少一の間のひまとも後くへ海山をも飛たると
 字の心のより時と時も時くのこととてはたなく
 時中平生のしとなり時と習とハ常く学びたること幾
 とびも味とべつとなく学問の訳も意得し心中の説ひ
 多うとべしとたり○あのごんご善を勧むるのそふへあうど
 凡てところの置どころハ善場にも悪き場にも常にようそふ
 との多うとへ深りのうして善にもむのうのうて徳自然
 と生じとらうとやうに見ゆるの誠ふふつとことかきとや

有朋自遠方來不亦樂乎

明有遠方自來
亦樂不人乎

怨て善にも惡にも類を以て聚るは朋友たがひて徳
 とを以て相あつちうして誠は位高たのしきなりや
 遠方より朋きくるとあきば
 近きところハ勿論なるべしと
 人不知而不愠不亦

あつた段く學問あつて胸中徳となく
久積し至るを君子と名づく然し人其

徳と知不或ハ人ノ善をまじめ論まじり却て信ト用
らまじりてあらざる然とらんども心よりやと恤ども心

此ハ徳の高く學問の深し入るとる兆しなりとぞ

○有子曰其爲人也孝弟而好犯上者

鮮矣スナ不好犯上而好作亂者ニ未之有也

御弟子有子の曰くハ、儀父ノ孝をほく、兄ノ弟を爲人かゝる必て上る人ノ高ぶるかゝと、或ハ惡ふげる。犯干の心の好みのハ、鮮矣。上る人ノ犯ぬちづの人かゝる、甜らやう。挙動を、作と心は、好みのひうより、未ノ乏有未と。

君子務本立而道生孝弟也者其爲

一と六本心の徳なり徳を成小命を
務れまうべし本明りし立と死は道理

の全体おのづから生ずべきことなりはの故に、して君子ハ本を
務むるのなり。孝なる者ハ君は忠なり、兄は弟さるゝハ
年長の人ハ恭敬し、さなり人々を愛さるゝのハ人々を愛せ
らるゝ。孝弟の道ハ本心の徳を為すの本なりとて

談を飛とりて
をうへひ笑わらふ

顔色をと令めど類の人ハ物を仁めぐむ心けりし鮮しの仰おほきうり鮮し矣とハ聖人實裕の御詞をして實したる矣

○曾子曰吾日三省吾身爲

人謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳

曾子ハ聖人の御跡を継ぐの第一の御門人
たり仰らるゝふハ吾まゝいあらまの三の品を以て

仁人果其官哉

習不乎

子曰百千乘

之國と道に

事敬して信

用と節に

て人を愛と民を

使時と以て

子曰百千弟子

入てハ則ち孝

出てハ則ち弟

謹んで信なり

汎く衆と愛して

仁は親く行餘力

有バ則ち以て

文を学ぶ

子夏曰く賢を

賢とて色に易

父母小事能其

力と竭し君小事

能其身と致し

朋友與交言て

而して信有ハ未

學未と曰と雖

も吾必と之と字

と謂(笑)助字

經典、餘市

りや吾身に慎まざるやと省見なりそのふハ人の
為に世話をせんを謀る名聞はかりて忠なりそのふ
あふハ二ハ朋友と交るハ信とて言のたハざるを
重とハ三ハ師より傳ふハ道ハ習ハるを教ハるの
意を發明するなり
○子曰道千乘之國敬

事而信節用而愛人使民以時

異邦の法を百里四方の國ハ軍役車十乘を出さ

それ國を治め道に法の三の条を要し敬事ハ

安し法度を定む信ハ法令に違ハざるを

をいハ節用ハ國の公用公務の弊を節し

民の財宝をとりてハ使ふハ下を治め

困窮に至る以時ハ民を使ふその家業のさるるを

を要し春ハ耕し夏ハ草を刈秋ハ實のりと收るを

冬の時ハ民の閑暇なるの時ハ池ふを等の公役を

○子曰弟子入則孝出則弟謹而信汎

愛衆而親仁行有餘力則以學文

子弟者家に入てハ父母を孝とす外に出

の人は弟とあふとて言ハ謹でもなく信ハ

汎く衆人ハ愛するにありある人ハ親

となく身を行の外ハ餘力の日もつハ聖賢の文

をも讀まらる事なり子

○子夏曰賢賢易色

事父母能竭其力事君能致其身與朋

友交言而有信雖曰未學吾必謂之學

矣

御人子夏の曰くハ凡そ人徳を好むハ色

を好む心をを用うる如く信實とて心

の絶えにれハ色ハ理の外と俗説のよくハ貧

世は道と人ハ愚の外なることを人とも行

賢賢とハ徳ある人を賢かりとてたつハ父

ハカを孝行ハ竭べし君ハ事てハ身命をい

論語

三

是邦也必聞其政求之與抑與之與

子貢曰夫子溫良恭儉讓

子曰父在觀其志父沒觀其行三年無改於父之道可謂孝矣

是邦也必聞其政求之與抑與之與

子貢曰夫子溫良恭儉讓以得之夫子之求之也其諸異乎

人之求之與

子曰父在觀其志父沒觀其行三年無改於父之道可謂孝矣

有子曰禮之用和為貴先王之道斯為美小大由之

有子曰禮之用和為貴先王之道斯為美小大由之

行はざる不所有和
知て和を礼を以て
之を節也亦
行ふ可かず不

有子曰信義に
近言復可也恭
近言復可也恭
遠言因て其親
と失はざる亦宗
と可

子曰君子食
飽を求るに毎居
安と求るに毎事
敏とて言ふ慎
有道に就て正を
学を好と謂可也
已

子貢曰く貧く
て諂ふやと富
で驕と金バ如何
子曰はく可也未

經史余市

父母の礼を重むるより法のを用ふ恩愛の
あつて遠嶋を用ふを和といふ先代の明王礼を用
ふと和を貴むは大小の事もその道なり
由り
有所不行知和而和不以禮節之
亦不可行也
子細人に和を好むを好で押く
溺る時礼法を以て節制をなすべし然るを見ざる
小はす礼法を以て節制をなすべし然るを見ざる
して行ひ
有子曰信近於義言可復也

恭近於禮遠恥辱也因不失其親亦可
宗也
信とい言の約と違ふを信を守るといふ
道とい言の約と違ふを信を守るといふ
義とい言の約と違ふを信を守るといふ
恭とい言の約と違ふを信を守るといふ

子曰君子食無求飽居無求安敏於
事而慎於言就有道而正焉可謂好學
也
君子道を樂む学を好むの外を願ふ
一は珍味酒食をかめり安んずる家の住居
の類を求るに及ばず行ひを敏て言ふ出づる慎
道有人に就て身を行義を好むとこれ誠
厚と謂べし
子貢曰く貧く
て諂ふやと富
で驕と金バ如何
子曰はく可也未

驕何如子曰可也未若貧而樂富而好

論語

卷之八

子貢曰く詩云
 切きつが如ごとく磋そが如ごとく
 琢たくが如ごとく磨とが如ごとく
 といふ其斯之謂いふ乎や

禮者也

子貢ここうの工夫くふうをす
聖人せいじんへ問奉もんほうる
それ小人せうじんの貧窮ひんきやう身をみとく
む時ときハハ必かならずて

清きよくくどど神かみ仏ぶつ祈いの誓ちか言こと或あるハ出家遁世しゅっけだんせい福入ふくいり

時ハ己ガ榮耀分限を憚らむ人ハ驕グシ少の惠と
りてとらむ人ハ其の惑をさうバ如何あしとの同ナリ

御答ごこたその義元ぎげんより可いといふべきなりとも一段その上ぞ
語ことばバ負うさとりふとも天數てんすうの定さだままる時節ときせふとりふ事こととさう

只道の樂さを社
たつとむべし富く身よ
うなむ万事
とのふてたうを
礼法を尚と分を守て
古人を友と

樂^{たの}みの場^ばをう^へりな^なむぐ^くつらむ^む女^{をんな}の子^こ貞^{ちか}曰^い詩^し云^い如^{ごと}く

切カ如カ磋サ如カ琢ツク如カ磨マ其斯之謂與子貢の云夫ありとの

上をすくく 聖人の深きへを承りて 詩經の辞といふて
 賛へ奉りて なるべし 細工をなして 角へていふ

切を玉ハドめ琢てその上を磋磨して遂に重

たふふ如礪如磨とハ聖人の深き丹一へ二比一て徳を成就

子曰賜也始可與言詩二矣士也

賜ハ子貢の名なり。聖人の聞きて子貢の

與^よ詩^し經^{けい}の徳^{とく}と^も言^いは^れる^{こと}已^い矣^やと^の作^{さく}な^き誠^{まこと}に^性に

かゝる一事を以て後に来たるの意を知つて其を

人也カ 凡およそ人ひとの身みは善よと得える即すなはち我われ徳

七 人より我に徳ありと知ると不知とを患ひ
人より願ふ徳あり人を此方より知ざるを患ふ

徳ある人を知りてふくむるを就きて善と
聞きとりの

鳥女第二

爲政第二

為政第二

爲政第二

經典餘師

人而
吾一
為文

二

二二集宜藏

子曰為政以德譬如北辰居其所而衆星共之
為に徳を以て之を譬ふ北辰其の居る所を衆星之に共が如し

子曰為政以德譬如北辰居其所而衆星共之
此段天下の政道を論じたるは、大に世を治むる人多く、利用を専らして、理法權の三つを用いる事、是れ利用とハ勝手と云ふ事なり。理とハ夫くの是非と云ふ事なり。是れ是非ハ分ちとも法よりかゝる事なり。是れ事も細鎖なる品は、是れも理あり法あり。是れも權威の重と以て之を抑ふ事なり。天下を治むるの要なり。然れどもその職より、程の才智が、時ハ又害なり。治世永くつゞく時ハ、極て金銀の利用を上へ用ひ、權を先へ立て、理と法ハ次より依て大方ハ、諂と賄賂の二つ行はる事なり。古の聖王ハ、民の爲に利用を施し、仁義の徳を以て政と行ひ、そのゆゑ天下の万民が、順うて道を守りて、たゞハ衆の星北辰を守りて廻る共が如く、北辰ハ天の中央北極の辰にある五星をとり、晝夜万代動らざる。其所に居あるは、帝座と稱して、天の分野として、天子の事に當り、衆の星ハ諸の臣下万民に當り、此の衆星ハ北辰を中として、これハ施共が如く、分野ハ野ハ土地の事なり。天の星を目當りて、つゞく事なり。此方よりハ何國の野なり。と野ハ分ちて名付る。章尤も謹んで按ぶべし。

子曰詩三百一言以蔽之曰思無邪
子曰まほしく詩三百一言以て之を蔽ひ曰く思邪は毎

子曰詩三百一言以蔽之曰思無邪
四書の中、毎く詩の辭を引、その詩經の周の聖代の時、高き賤きと云ふ事、其の詞葉三百篇を載し、古代ハ人々民間にても歌謡りてあそび、其の意、今ハ天朝の政業集の如く、辞古雅うて、教の意あり。今ハ儒者とて、通曉する事、其の地ハ、老如野女、貴賤都鄙相と云ふ人情を通じ、知なり。聖人も詩經を知りて、一面を攝は、あてなり。如く行つて、如く仰あり。一なり。さて聖人の仰ふ詩經の意多し。と云ふも、其徳の言を以て、述蔽するべし。と云ふも、他の義も、其もたゞ詩の徳を心に意得なとあり。人々邪惡の思ふて、無きやあるべし。と云ふなり。

子曰まへく之を道
ひに政を以て
之を齊くするに
刑を以て民免
るを恥と毎

之を道ひて徳
を以て之を齊
くするに礼を以て
恥と有し且格

○子曰道之以政齊之以刑民免而無

恥國を治民を道ひく政を以て事後世に戒

り違背の者ありて之を犯す其輕重に依りて或ハ鞭撻又ハ流罪一すハ殺等の刑を以て懲ら

さるは依て民恐れて齊くするのよりなり聖人仰ふ

かの如きもの仁者の徳政といふべし何となく民を刑を以て邪惡をあらはするをりふて心中ハ

道之以徳齊之以禮有恥且格

聖明の君ハ徳禮を以て民を道ひて之を齊くするに孝弟を行ひて賢者を貴て擧げりて礼を以て臣を

使ひて愛を用て民は臨む税斂貨殖を薄く省さる

貧民を救ふ然るに民上を戴く者ハありト

加之なり義理作法の礼ありと民は知ら然

とハ下なる心は邪惡の道ありぬと心は耻して齊

免るく世の安らぬその本といふ民は義理の心を

起さるる起さるる人君ありく之をあらはる

○子曰吾十有五而志于學三十而

立志は聖人自ら御執行の事を述るなり聖人といへ

どもと學びぬる事と一聖人仰らるるは學志

ざせハ吾十五の年なり道理を求め見識

四十而不

惑五十而知天命六十而耳順七十而從心

經典余帀

論語一

九

王集集官藏

矩を踰不ところより従ふも

孟懿子孝と問子曰まへ違と無

樊遲御子之に告て曰まへ孟孫孝と我問我對て曰く違と無と

所欲不踰矩

成就とく人間の徳とく人年を經て徳

七十の御年ふ心より何事をもそのまゝ行ひふまゝ自然と人の法則となり天地の矩は踰らばさういふ人々も聖人へ生知として生きたるに依てかくの御深切な説のいふも

○孟懿子問孝子曰無違

孟懿子へ魯の大夫

樊遲御子告之曰孟孫問孝於我我對

曰無違

御車を引ぬ役なり御弟子樊遲折ふ

小孟孫前々孝の道を我問一ゆ無違と答へ一が

樊遲曰何謂也子曰生事之以禮死葬

之以禮祭之以禮

樊遲對て何なる謂ふや

小身の分限を亂るゝとなく親の心の安らぐやに事を

世に在り如く事奉るを礼といふや七十年或ハ十三

年十七年と程を定めて祭をたふ比ハ敬むを祭一

祭と云ふ礼を盡し事するは於て違ふとなく一の義

○孟武伯問孝子曰父母唯其疾之憂

武伯ハ孟孫の子なり聖人孝の道を説くハ父母の

子を憂ふと何う何まてのさうとなく一むもこゝろを

子夏孝と問子曰
 まはく色難一事
 有べ弟子其勞
 小服酒食有先
 生饌と曾て是
 を以て孝と為乎

孝者^ハ是^レ謂^フ能^ク養^フ。至^リ於^ニ犬馬^ノ皆^レ能^ク有^リ養^フ。不^レ
 敬^ビ何^ニ以^テ別^レ乎^ヤ。
 弟子^ハ游^ブ也^ハ。文^ハ章^ハ也^ハ。御^ス答^ハ今^ノ之^ノ孝^ヲ行^フ御^ス

といふ父母をよくあてゝ養ひさへするはよしと思ふとも
さうとくぞ鳥獸はかぎりなく自賊すこと好む鳥そふあれが
器物を入れて能養ひさへするにあらずや然ば養ひさへする
孝はあらずぞ恐き敬まふ道を第一とせざるも孝なるん
恭敬の礼さへなくする時は何を以てん
鳥獸を養ふとの別らあらず乎とぞ

○子夏問孝

子曰色難有事弟子服其勞有酒食

色は易らむ愉べし。くさくさ色を第一とて他人を對するも孝を心よかる者か。の如く有るを色は難し。とてさして何より。又孝と事ある心得て子弟たる者ハ六ヶ布ををうけたり。或ハ早くかりて其心勞を助服べし。酒宴食事の饌ハ先嘗は先生の方へ就き。さうぶ。是等を以て孝の道と爲乎。

○子曰吾與回言終日不違如愚退而省其私亦足以發回也不愚

同とハ御弟子顔淵の御名ナリ聖人の御門中ニテ大徳の
 御人ナリ世ニ節用集とリ書も三聖人とある下ハ
 聖人と顔淵と天竺の釈伽如来ナリ聖人ハ顔回と言
 ぬハ吾終日間共ニ道を論言ハ言がるに餘の門人の如
 疑を尋問とハちグヒテ聞流をめるて違問とリ一事
 ナク愚心なる者の如一夫ハ席を立退て後その私
 こその様子を省めれば吾意よりもその人を発明
 してその光を増足果してちチちグを回ハ愚なるに

子曰まぐ吾同與
 言のふひもすたらと終日違ひ
 不ずと愚ぐなるごと如ど
 退ちひそのついでて其私そのついでを省くふ亦また以もつてふ発はするに足たりふ
 同愚いなり不む

子曰まぐ其以て
 所を視其由
 所を觀其安
 所を察人焉
 ぞ度る哉人焉
 子曰まぐ故を
 温て新しきと
 知る以て師と為
 可
 子曰まぐ君子ハ
 器たる不
 子貢君子を問
 子曰まぐ先其言
 を行ふ而して

○子曰視其所以觀其所由察其
 所安然又其由其所行と氣を付て觀べし由たふ
 所ハ善きと又其心を安つけ樂む處と氣を付てふく
 さら一察べし視觀察の三字同ト見とて淺き深きの義
 人焉度哉人焉度哉 右やうにして其人柄を試み
 馬胸中を度る人哉
 ○子曰温故而知新可以為師矣 同の徳
 の高きこと故く習學する事と考へ温て自らの工夫して新
 事を悟るべし然る人の上よ立て師と為ても可し 若令
 耳は聴や否口の齒のせて人ハ高きといふ 子曰君子
 口耳の間四寸の學として胸中につかざるもの 子曰君子
 不器 君子ハ筋の偏寄てかくるはくさるをり器は
 器をくはハ蓋が提子の役をたさ矩の規のひり
 かるも君子ハ偏寄
 ○子貢問君子子曰先行
 めを以て不器といふ

後之に従ふ

子曰まぐ君子ハ

周くして比より不

小人ハ比より周

の不

子曰まぐ學で

思へ不則ち罔

思て學不則ち

殆

子曰まぐ異端と

攻ふハ斯害かる

也已

其言而後從之 子貢君子の道と問奉る御對世の
 の行ひ偽らざる君子ハ先口よ言と先身よ
 施して其後よ言ぐるなりと仰せらる 子曰君子

周而不比小人比而不周 君子ハ周く小人ハ比する
 隔なく照るのふとく 依怙顯肩の比するなり又下
 小人ハその裏腹たるをくくればくくかむや小人ハ

位なく徳さる 子曰學而不思則罔思而
 人を名付たり ○子曰學而不思則罔思而

不學則殆 今日學問をたふも習ひ聴くも思て
 固まりたる心は道を尊びあふとくも學ばざれば心
 殆むとる貴人を敬つとる礼を不知る心殆むとる

子曰攻乎異端斯害也已 都て流義の
 ちる心違ふと異端といふ端と異なりとの義
 まるれば互に理を以て攻合するも益なきのなるに却て

子曰まへく由女ふ
之を知を誨ん乎
之を知を之を知
為知不也知不
為是知也

子張祿を干ると
學

子曰まへく多聞て
疑を闕慎で其餘
多し見て殆を闕
慎で其餘を行へ
則ち悔寡言
尤寡く行悔寡
けは祿其中に

在矣助字

哀公問曰何為
為則ち民服
孔子對て曰まへく
直を奉て諸の狂を
錯べ則ち民服
を錯べ則ち民
服せ不

季康子問民
敬忠以勸如之

季康子問民
敬忠以勸如之

斯爭の害
○子曰由誨女知之乎知之為
知之不知為不知是知也
女は知者とて人の道を誨べし
若くは人の病なり免れん
て若くは人の病なり免れん
逢て問尋べし早速身小益あり
者也○子張學干祿
御門人子張の為人の官を得
事とまへく干とるの
則寡尤多見闕殆慎行其餘則寡悔言
寡尤行寡悔祿在其中矣
告のしる官は有者ハ鬼に口ふ言とて身は行は
を慎むべし万事の理を人より多く聞てその内疑ふか

事あるハ闕置て必し知願
成行を多く見て殆いとハ闕置て心は餘し
多し慎て行へば多しとて心は悔とてなり
祿を干とるの道は人の中は在るなり
○哀公問曰何為則ち民服孔子對て曰
直錯諸枉則民服舉枉錯諸直則民不
服
上へ奉て狂諂諛人を其終に捨置べし
人上よりあるて万の法はあれより出
とて人の人を敬むて言はく
愛相とて人の者ハ多しハ正直
仰らる

○季康子問使民敬忠以勸如之

季康子問使民敬忠以勸如之

季康子問使民敬忠以勸如之

何子曰臨之以莊則敬孝慈則忠舉善而教不能則勸

魯の大夫季康子の問なり下への民をもに上を敬ひ忠義をいふ

勸ふハ如之何乎して宜やと問奉るる御答上より人下々に臨るるにハ莊き身持第一なり莊におもく

と訓て人を罪するも人を取立ちふも輕布せざるべかり初る罪すを却て斥落かる事ありささくなく取

ちまよく勸る者をもとり落さるなりうつく布物をとり奉る下怨なり依て上より立人莊かをば則ち民より

重し敬まふなり上より下を孝慈バ則ち下より感ずて忠心を抱くなりさして善者ハよく奉ずる善事の不能あるも捨む無藝不能なる者をも不捨して是を教ふ時ハ

下より道は勸むなりさして治世を見らば諸侯は庶才の人ハ至

て希なり然れども僅に書を画を好むハ其國中の小人を

挙て稱する事なり高位の徳ハ少くても氣味あま下

その倍を以て唱へ出る事なりあま君子の

下へ施さるるのいうちを其兆あると見よと

或謂孔子曰子奚不爲政

聖人輒曰く國の
政道ありは與ふ人

子曰書云孝乎惟孝友于兄弟施於有政是亦爲政矣其爲爲政御答書云見之家有之語

御答書
見家
有て公

孝乎父母は事て惟小孝行ふべく兄弟の同の心は友
親らぐ一匙は家の政なり國を治るも其義を此
廣りて國家は有処の政道は施さるべきは
政を爲たり奚ぞ其格別は國政をのり政事と爲やとぞ

政事まつりごと 何なんにもつておこなふこと

○子曰人而無信不知其可也

行戲

糸え 食や 哉や
 之え 行や 人や 哉や

子張十世知可を

問

子の曰く殷ハ夏之
礼ヲ因リ損益セリ
知可ク周ハ殷之
礼ヲ因リ損益セリ
所
知可ク其周
經者或バ百世
雖

とも
知可也

子曰まほく其鬼に
非^{あら}く之^{これ}を祭^{まつ}ハ
論也

論語

今日人と生きてハあの信を第一とて信なふより、
 この故に仁義礼智の四つよりも儀を下し置たるに仁義礼智
 ハ東西南北春夏秋冬の如くなり信ハ中央と土用とに比
 て此を除くより之を信といハ道を違ふなり君父ハ忠
 と孝との道と違ふより也ハ推て知るべし人と而しての信
 金バ其可べきの理を不知信なき人ハたとへ牛車の轡小
 轡多軛なく馬車の軛木なきこと同トとてなり
 何を以て道を行む理あり哉となく

○子張問十世可知也

子張の問こくなり大なる人おほき
 世に先さきの永ながきと

子曰殷因於夏禮所損益可知

也周因於殷禮所損益可知也其或繼

周者雖百世可知也

此段怪同は正き御答是
誠は聖人の妙言なり且

世の大がなう者を挙て此後くても多う言をのべり
即ち聖人の御代ハ周の御宇なり周の前を殷の代とし

殷の前を復の代とり、復の代、四百餘年の後、殷とたり。

然る小天下を治る大事の礼法ハ如く捨てざるの理なり一年
の月日と十四ヶ月十五ヶ月ともけざるよりくなく罪の重を

生ても置きまゐるなり 是をバ殷ハ復の社を捨ちて因
用といたなり 殷の代六百余年の後今の周の街宇となす

是^{これ}は^は殷^{いん}の^の礼^{らい}に^に因^よる^るは^は因^よる^るな^ない^い然^{しか}し^しも^も時^{とき}の^の宜^{よろ}し^ききと^とす^する^る事^{こと}の^の品^{しん}

今いま天朝てんてうを用もちふふくく寅とらの月つきを正月しんげつを用もちふふくく殷いんハ

十月を用ゐるは是子へ天の時丑へ地の時寅への時

古くハ地ニ養フモノナハノとの義より人の世なれば人を

尚ふ殷こゝろや進物の質しつなり彫う子ハ飾かざりの文ぶんを用もちゆ類

此後周の世は繼て興る御代の幾度或は乃至百世後の事

知べし道理之
○子曰非其鬼而祭之謂也

聖典餘帀

命
呂

三官藏

義を見て為不
勇無也

八佾第三

八佾第三

鬼と人の死をいふ。今やこれに似たり。天朝
とて、天竺とて、ハハとて中華とて、ハ通
然るに子なる者、世にたゞとて家の事を
さうハ不孝といふ。依て大小吉凶の事、必
鬼神に告ぐ。俗人動もそれバ欲からず。願
先祖の鬼、もあめぬ高位他人の家の鬼神
これハ諂とて、いふのうて必だ利益あり。と
天朝鬼神論よ。見義不為無勇也。此段志
と重く。所かり何事。義理。忠臣。小人。言。人
あふ。己が身を捨てて之を殺す。是道。叶
たう。う。よ。い。見て。不為。あり。是。憶。病。の。第一。勇。気。
とて。人の。上。可。置。
もの。い。い。と。

孔子季氏を謂
八佾舞於庭是
不可忍也

孔子謂季氏八佾舞於庭是
不可忍也

三家者雍
穆穆奚取於
三家之堂

○三家者以雍徹子曰相維辟公天子
穆穆奚取於三家之堂

此季氏之季氏也。孟子曰：季氏之三家，惡逆無道。季氏之季氏，聖人亦不與之。天子之宗廟，祭之。祭畢，徹。徹之時，雍之詩，誦之。雍之詩，誦之。御相之人，維之。維之。辟公之方，穆穆。穆穆。天子之御，三家之者，奚の理あり。礼を犯し。比堂。之。然。行。や。天人也。に罪を。之。事なり。天朝。於。一向。詞。もの。事。有。なり。

子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」

子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」

林放問禮之本。子曰：「大哉問！」

子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」

子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」

子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」

子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」
 子曰：「人而不仁，如禮何？人而不仁，如樂何？」

文章の根源ふ在りて見たり。我諸夏に礼樂
 倍臣として天子の礼を犯りて、誠人画一の
 行なり。君臣の名のこたへて礼義を正しめ、亡はれ夷狄に
 如くなり。○天朝は万邦の宗と事。今、非とも
 誠は君臣の道、天地日月の如く、万代不易自然と相犯さ
 なく、其光明なり。固より中華夷狄の及ぶと、あつて諸夏
 とへ夏ハ大の意なり。中華ハ諸くの大國ある土地なり。の
 義なり。

季氏泰山に旅を
 子冉有ふ謂て曰
 弗乎對て曰能
 曾て泰山に放し
 如不謂乎

○季氏旅於泰山。子謂冉有曰：「女弗能
 救與？」對曰：「不能。」子曰：「嗚呼！曾謂泰山不
 如林放乎？」
季氏は上を侮慢て無道なるを罪し、いふと人の臣る者ハ君を強て諫べし。若用されハ官禄をとて去るべきを

子曰：「まほしく君子
 射乎？」揖讓して
 而升下て而して
 飲其争をひひ
 君子なり

○子曰：「君子無所争。必也射乎。揖
 讓而升，下而飲。其争也君子。」
争怒りつゝの心、挟く量の罰より起かり。忽ち耳に聞
 忽ち目に見る。こゝに簡せざる故なり。日月を踰てハ

子夏問曰曰巧笑倩兮美目盼兮

存トよりを信向さるる人は是非の信向なきよりめんとさるより起るなり

○子夏問曰巧笑倩兮美目盼兮素以爲絢兮何謂也

素人の笑ハ口輔の巧情分なる目ハ盼分なる素のて以て其上は絢を益とあり何の謂にやと

子曰繪事後素

以て仕立夫と云ふは彩色を施さるるを素と云ふは後より

音信の礼あるべしと云ふは禮後乎

其下地あるべしと云ふは先忠信を以て本として而して礼を

子曰夏礼吾能言之杞不足徵也

子曰夏礼吾能言之杞不足徵也

禮吾能言之宋不足徵也

也足則吾能徵之矣

夏の杞宋の國ハ殷の末なり

故に證徴とせざる小不足也

文獻有バ吾能之と證徴

とて尚明なり

或ひく穉之説を
問子曰まへく知不
其説と知者之天
下おほ於其諸を
斯こゝ示しめげ如手其
掌てのひらごとろと指ゆびさる

○子曰禘自既灌而往者吾不欲觀之

○或問禘之說子曰不知也知其說者之於天下也其如示諸斯乎指其掌

此段ハ一人が禘之祭の説と同奉然不知との御答ハ
右ふも説とて誤りて其理をのぶると元より天子なりて
祭らざるを誤りて魯の國へ對し諱とて其理をのぶる
敬に至らざる故に明きまに仰なくとも其理をのぶる
元禘の祭ハ天子御先祖を上天へ配祭なり其礼式ハ仁
孝心さうく誠と敬の深を用ひて是此上なり因て仰も
其禘の説を知りて人の人ハ天下を治めし道に於ても心安
世を治めし道に於ても心安

祭まつりと在いまる如ごとく神かみ

祭と祭と神在ちんいんが
知し一

祭如在祭神如神在（上も下も）人同（ち）知（ち）（ハ）

子^こ曰^いま^まは^はく^く五^ご祭^{さい}に^に
與^あら^らず^ず示^しは^はく^く示^しは^はく^く示^しは^はく^く示^しは^はく^く

其義ハ即ち神如在といふ事ナクと仰らるゝまう
祭まつりハ子こ者もの自祭ベき
五ノ身祭ノ事ニ一ノ無

子^し曰^いま^まは^はく^く然^{しか}采^{さい}罪^{つみ}
を^を天^{てん}は^は獲^{とく}ハ^ハ禱^{いた}る^る
所^{ところ}在^あり

子こ曰いままく周しゅうハ二
代だいを監かんして郁いく郁いく
乎かして文ぶんなる哉や
吾われハ周しゅうニ從したがふ

子大廟より入て事
毎二問或いひ曰く
孰より鄭人之子礼を
知と謂乎大廟に
入て事毎二問子
之を聞て曰まはく
是礼也

徑與余而

卷一

卷之四

上集

已を引下人へ後を第一と云ふ法を極め事國法
やうな故典といふ事もあるが不知を知りてのやうな金礼なり
即ち大廟に於て毎事ふも同じ合ふは直は是礼といふ者
或人礼の本意を知ぬ故なりと仰る聖人鄭は御生つて故
郷の子弟といふて鄭の
邑人の子とナリたり

子曰射不主皮為力不同科古之道

也射の本意ハ己を正と第一ハ己が身正しく射中し
なり誠は君子の徳よりなるやうな大藝なり然る當時ハ

革を以て厚く張的を射通を主と古之道ハ皮を貫くハ
主とせんといふと力量の科不同ゆへなりとぞ

子貢欲去告朔之餼羊古ハ天子より諸侯
曆を頒與り之を

拜領して先祖の廟堂へ藏て月の朔日羊を以て酒宴
の祝を告る餼羊といふなり
酒宴を用て寄合をりたり依て子貢の心は也やハ礼も

かりに事なり事をいふハ益益なり
子曰賜也爾

愛其羊我愛其禮聖人の御意にありてハ
礼ハおろしきなり

羊は其跡負うて本ふりて時節もあつて
何とて吾ハ其礼の廢さるゝと愛なり再ハ口羊と
愛といふのなり○天朝より舊礼の殘てあるは華夏三
の事といふて品さるゝ何とぞ本のどく平とある

子曰事君盡禮人以爲諂也

臣として君をおろそかにし事道は背の大方なり
依て聖人君を厚く尊敬するの道を示し然るも
今の世にて礼を盡る人なく諂を以て為となり

定公問君使臣臣事君如之何孔子

對曰君使臣以禮臣事君以忠

子曰まへ射ハ皮
と主と云ふ力科
と同と云ふ為
古へ之道也
子貢告朔之餼
羊を去る欲と

子曰まへ賜也
其羊を愛を我
其礼を愛を

子曰まへ君に事
して礼を盡人
諂と為
定公問君臣と使
臣君小事之を
如何孔子對曰
まへ君臣と使
礼を以て臣君
事に忠を以て

此段定公聖人へ同奉るなり君の臣を使之る臣の君に
 事奉るなりこの道は如何となり御答君と臣と義の重きを
 以て合休なかりしなり君の任ハ周を用人正しく坐し
 りて臣下を治るひ人を用ひて倚偏なく重威を以て
 忠と不忠とを心よりけむ是を礼と臣下の任ハ敬を重く
 万事大小に就ててやまひの心を盡さず我生命ハ君に奉り
 一者と定べし君の礼あるとなさるなり
 心よりくべし是を忠といふ

○子曰關雎樂而不淫哀而不傷

關雎詩經の始あり我なり文王の徳より天下を化し
 て能治るるをのべり徳と偏倚なく中庸の節制にあり
 哀れども身命を傷となく

○哀公問社於宰我宰我對曰夏后氏以松殷人以柏周人以栗曰使民戰栗

哀公社の義を御し人宰我より社の義ハ古へ土地に功德
 あり人を其処に祭る天朝の鎮守産土氏神等なり社
 ハ必し樹木を樹かこむなり其風儀夏の后の代は松
 殷の代は柏なり當時周の代は栗なり極いへハ罪
 ある者を社の傍に戮ありしなり宰我對の心ハ人の
 畏るるを栗といふ今樹木小の義をとりて人を戰ひ
 栗使ふなりとぞ此段宰我辨言は名を得し罪なり
 聖人此を責めし來社よりゆる木ハその土地に用ひて
 宜きを樹とあり右宰我の述し義ハありを松と柏と
 問ひ何の義は取て答ん強ていふ松柏の二木も操節の
 貞固徳は取べしとせん誠は君子ハ言語を深く謹み
 といふ宰我の辨ハ口小出にまことといふのなり

子曰成事不說遂事不諫既往不

咎

聖人右の事と聞めしと嚴し責めはむしてその後を
 誠は成し事ハ説きとせて益なく遂る事ハ諫て益
 なく既往は往るしと咎むるにやまざるの作なり

子之を聞て曰ハク
 成事ハ説不遂事
 ハ諫不既往と外
 不

子^し曰^いはく管仲^{くわんちゆう}
之^の器^き小^さな^る哉^や

或あるひと曰いく管仲くわんちゆう
 儉けんなり乎や曰いまはく
 管氏くわんし三歸さんき有官ありくわん之の
 事こと掇と不な焉やを儉けんと
 得え

邦君樹て門を
塞管氏も又樹て
門を塞邦君兩君
之好と爲よ反坫有
管氏も又反坫有
管氏よして礼を
知バ孰と礼を知不

子魯の大師に樂ふくろと語て曰まはく樂ハふくろ其知可ふくろう始作ふくろは

熊沢先生の曰く凡て同様の人々その人の言を信とせりゆへは云ふ所のも必しも已に正し明めざることといふやうになつて今この僧ハ只仏の名を唱と身小僧衣を着て身小僧とせり法として天竺の教をもつてゐることをのべ飭る儒者の國家に益なきこと

○子曰管仲之器小哉ちへの管仲ハその主君

齊の桓公の軍師となり桓公を覇者となり威を以て天下を服し天子を守護なり奉ずる然とも明德仁義と以て

して才知權謀の下知なり一は聖人なりといひて小なる哉と仰らる小ハ心せまくりやうくりひさじなり

或曰管仲儉乎。曰管氏有二歸。官事不攝。馬得儉。聖人の小と仰うまじき。或いとうけのうらて思ひこころ。管仲ハ儉約なる人よりや小なり。との仰ハいふとなら。聖人仰ハ管仲ハ儉といふのみ。非ど管仲ハ遊覧の臺ハ三歸と号て義々布造構あり。又管仲ハ諸衆の臣下ハ兩役と官を撰とす。然則管仲知禮者なり。大夫の例よりさして。

乎曰邦君樹塞門管氏亦樹塞門邦君
爲兩君之好有反玷管氏亦有反玷管
氏而知禮孰不知禮或ひと聖王人の御意を知む
又思ふハ管仲儉なりバ

如何御答管仲しやんちゆう礼をれい知るといふべきなりとを子細こさいに一邦の君
 の屋形ハ表門と内の見附の間ハ樹木を樹て塞ふさとなせり
 はの事倍臣もその格式きふしきよりいふも平安の本願寺等之を
 用もちてさとり兩邦の君の出會ふハ互城の間ありちぎひぎとの
 中うちに例れいとして楹けいと楹けいの間まは盃さきをのせ置おきとありけし
 今管氏倍臣としてさう之を用もちゆ管氏かんし礼をれい知るといふとしんとぎ執
 人もとる礼をれい知るといふべきりのなり程先生の曰く三帰の
 著ちやうとたりさうと上うへとる礼をれい犯かちり
 まれ器量きりやうの小哉所以なり

○子語魯大師樂曰樂其可知也始作

三十一 果集官版

子曰まほく上居

て寛く不礼

為敬不喪

臨喪不吾

何を以て之と觀

哉

里仁第四
子曰まほく里仁

聖人の詞明鏡の如く人ありて天朝の天子とて天朝の天子の國に及て中華夷蠻の

子曰居上不寛為禮不敬臨喪不

哀吾何以觀之哉

量は付て行はざるも色顔を出さず人その胸中を量るに敬するて高き喪中哀の節は心もさげし人情を失ふことなり

里仁第四

子曰里仁為美擇不處仁焉得知

此段住居を邑里人情厚く居る所を義の擇むにあり野は處べし本心を失ふことなり

失ふ焉を知を得人なり

子曰不仁者不可以久處約不可以

長處樂仁者安仁知者利仁

子曰まほく不仁者
以て久く約は處
可く不以て長く
樂は處可く不
仁者ハ仁は安ん
知者ハ仁を利と

仁は心徳を我物として義理の場は心を安んじて在ることをいふ不仁者ハ心の置処をうりて安んずるに不仁なる人ハ久しく困窮の場は居て心約を長く操節をくわして不義なるものなり安樂の場は處を守る者として奢るたうて必むくくかきし困て仁者ハ仁の場は心を安んずけ道を守るに知る

子曰惟仁者能好人能惡人

仁者ハ心の心か人々を愛し好むもまた人々を惡し捨るもまた義理をさぐるものなり

子曰苟志於仁矣無惡也

人苟志於仁矣本心之善也求之於心而志之於仁則無惡也

子曰富與貴是人之所欲也不以其

道得之不處也貧與賤是人之所惡也

不以其道得之不去也

然其場也其場也富貴立身之場也其場也其場也

君子去仁惡乎成名君子無終食之間

違仁造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

造次必於是顛沛必於是

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰まぐく人之過
を過るる各其黨に於
て過るるを觀て
斯は仁を知
朝の道を聞て
夕死とも可矣

士道に志ざり而
て惡衣惡食を
耻する者ハ未與は
議ニ足未也

君子之天下に於
て適無莫金義之
與に比ぶ

君子ハ徳と懷小人
ハ土と懷君子ハ刑
と懷小人ハ惠と懷

人々仁の道とて何ぞ骨節を六ヶ布するに思ふか用
ゆるとなく中へ入る者なれども一日ふくむ心とせ
かんよ力の不足してつづぬといふ者を見未り又刀乃
たぬ者之有りと蓋ひたすども我未之と見えざる

○子曰人之過也各於其黨觀過斯知

仁矣 凡て人の過失といふのハ善も惡もその心の依黨
をもととるるはゆゑなり君子ハ心厚き誠より

知都の心とやくさる者ハ過ふよりてこそ本心の道仁の
工夫も知る

○子曰朝聞道夕死可矣

人々都ハ義理を弁じ人々有るべしは朝のつても
人々の道を聞て心を得ばその夕の命を死とも

○子曰士志於道而恥惡衣惡

食者未足與議也 士ハ志のつて男子をとり
凡て人々都義理の道も

志ざりて鄙る心より引くる事なれども人々都
坐して己が衣の惡しきとをくく愧ず人々都膳部食物

の不及を耻する人々の權威をくくや妬たぐハ未足
とるるをぬといふ者ハ相與る義理の議をくく不足

○子曰君子之於天下也無適也

無莫也義之與比 徳あるハ世間の理
何事ハ限も適といふも

莫し金也只義理に滴り不吐と心省
事くく凡て義理は與に比し

○子曰君子懷徳小人懷土君子懷刑

小人懷惠 君子ハ常は心の徳を新へ
常は身と安樂の土地に安んず

君子ハ今日天道の眞如を思ひりや道は急まハ刑
逢ふとて思ひ懷小人ハ吾身の仕合の惠あることと

懷にたつ慎むと
事なつとや

子曰放於利行多怨

能禮讓以國

禮讓為國如禮何

子曰能以禮讓為國乎何有不能以

禮讓為國如禮何

子曰不患無位患所以立不患莫己

知求為可知也

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰放於利行多怨

能禮讓以國

禮讓為國如禮何

子曰能以禮讓為國乎何有不能以

禮讓為國如禮何

子曰不患無位患所以立不患莫己

知求為可知也

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

子曰參乎吾道一以貫之曾子曰唯

賢^{けん}と見^み齊^{せい}とを
思^{おも}ひ不^ふ賢^{けん}と見^みて
内^{うち}は自^{みづか}の省^{けい}る

○子曰君子喻於義小人喻於利

子曰見賢思齊焉見不賢而內自

省也 ひとごととすべし
 人の善事よきことを己おのれに賢かしこむ事を見えてハ必かならずく吾われも
 その如ごとく齊あつく人ひとと共ともに終はるべし又また不ふ賢けんぬ

事を見て、なりや、ご身みはあゝと
自みづかりづ省しやうとうぶうとう

○子曰事父母幾諫見志不從又敬不

違勞而不怨

行ひを乱^{みだ}るゝにハ諫留^{かんりゅう}せし居ハ不孝^{ふこう}なりり
父母の行ひ悪^{わる}くハ幾^{いく}くともやまらざるのハ諫争^{かんそう}なりり
父母の心志^{しんし}徒^{ただ}がたに見付^{みつけ}るハ早速^{さつそく}なをり
その心は不違^{ふち}て恭敬^{きやうけい}し、苦勞^{くろう}を致^{いた}さざるなりりや
怒^{いか}は逢^あて苦^くむも怨^{うら}む事ハ露^{つゆ}やぐも
やまべしむむは色子^{しきし}の道^{みち}なり

○子曰。父母在不遠遊。遊必有方。

父母をもちて身ハ世は在るハ父母の心を安堵ふこと
あむとを弟一とせよ世を去ることも己が心のすゝを
妄は行へばこの理なり父母在るときハ遠方の所へは
遊留まらばのうべたと遊居とも必む方角を定て告知せ

父ふ母はは在あバ遠とほ遊あそ不ず
遊あそふ必かならずバ方あた有あリ

父^{ふち}母^{はは}の事^{こと}で幾^{いくばく}く
諫^{いさむ}志^{むす}す從^{したが}不^ふを
見^みて又^{また}敬^{けい}して違^{たが}
不^ふ勞^{らう}して怨^{うら}不^ふ

その所をたゞむば
まづのふべさる

三年父之道改
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰三年無改於父之道可謂孝矣

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰父母之年不可不知也

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

一則以喜一則以懼

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰父母之年不可不知也

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰父母之年不可不知也

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰父母之年不可不知也

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰父母之年不可不知也

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰父母之年不可不知也

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰父母之年不可不知也

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰父母之年不可不知也

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰父母之年不可不知也

父母之年不知不
可謂孝と謂
父母之年不知不
可

○子曰父母之年不可不知也

數されハ斯に疏る

矣

子游の仰せふれそ主君に事する者ハ群り國家の大事ふかり乃至御名にかかり事あるハ

諫言をいへば一埒もなきことと數々の時却て恥辱をとりぬるなりよし小事なれば朋友の道も義を以て交はるは互に信實をたてしむべし然る事あはく言語に出バ却て疏るものなり凡て諫するハそのいふこと

萌んとする所の場をうけしむべし又事成ハ益ありたりとのなり〇三たび諫て君用を官禄を辞退して

去とあり是ハ治世毎事なる時なりり君の大事ふ及たんとする時ハ身命を社さるべきなり又佞人ありて

上を暗に死ハ私の意趣に諷して生命とら果ては忠のいふなり天朝の明道かくの如き事古来より

忠のいふなり天朝の明道かくの如き事古来より士ハ異なれど中華といへば誠忠の

公治長第五

子公治長と謂く

妻を可なり縲

子謂公治長可妻也雖在縲紲之中非

公治長第五

其罪也以其子妻之

其罪也以其子妻之

御人公治長へ御息女を

子南容と謂く

子謂南容邦有道不廢邦無道

免於刑戮以其兄之子妻之

邦道有ハ廢れ

子謂南容邦有道不廢邦無道

免於刑戮以其兄之子妻之

不邦道無ハ刑戮

子謂南容邦有道不廢邦無道

免於刑戮以其兄之子妻之

を以て之に妻を

免於刑戮以其兄之子妻之

御人南容ハ

子子賤を謂く

子謂子賤君子哉若人魯無君子者

斯馬取斯

君子なる哉若の

子謂子賤君子哉若人魯無君子者

斯馬取斯

者金ハ斯馬んぞ

子謂子賤君子哉若人魯無君子者

斯馬取斯

斯を取人

斯馬取斯

御人必子賤ハ本より賢と敬ふ徳を

子貢問曰賜
如何子曰
女器也曰
何の器のぞ
曰瑚璉也

或曰曰雍
仁一佞
子曰曰
佞用
口給
人憎
知不

子漆雕開
使對曰
之未
能未子

子曰曰
不悖
海
子路
喜
由
我
所

經由余市

賢人多
習君子
子貢問曰賜也何如子曰女器也曰
何器也曰瑚璉也

或曰雍也仁而不佞
子曰馬用佞禦人以
口給屢憎於人不知其仁馬用佞

子使漆雕開仕對曰吾斯之未能信

子說
聖人
大道

子曰道不行乘桴浮于海從我者其
由與子路聞之喜子曰由也好勇過我
無所取材

入部五十一

三十三

上集集官裁

聞て以て十を知
賜ハ之を聞て以て
二を知

子曰まほく如弗
たう吾女の如弗
を與

宰予晝寢
子曰まほく朽
木ハ雕可べし不糞
土之牆ハ朽可
不予に於て與何
誅人

子曰まほく始め吾
人よ於る其言を
聽て而して其行
を觀る予に於
與是を改む

吾未だ剛者を見
未或ひと對て曰
申張子曰まほく

一以知二

御門人の中子貢の常
女と顏淵とハ孰れか
より顏淵と及バど
ハ万事の理其の端を
吾ハ之を聞て其二を
顔淵の名なりかく古
及ぶる及バどある後
顔淵ハ及バど賢愈
より顏淵と及バど賢
顔淵ハ及バど賢愈
顔淵ハ及バど賢愈

子曰弗如也吾與女弗如也

顔淵ハ及バど賢愈
顔淵ハ及バど賢愈
顔淵ハ及バど賢愈
顔淵ハ及バど賢愈
顔淵ハ及バど賢愈
顔淵ハ及バど賢愈
顔淵ハ及バど賢愈
顔淵ハ及バど賢愈
顔淵ハ及バど賢愈
顔淵ハ及バど賢愈

○宰予晝寢子曰朽木不可雕也糞土
之牆不可朽也於予與何誅
宰我御門人

子曰始吾於人也聽其言而信其行今
吾於人也聽其言而觀其行於予與改
是右御門人の跡
吾始より人との交接
吾人との交接
吾人との交接
吾人との交接
吾人との交接
吾人との交接
吾人との交接
吾人との交接
吾人との交接
吾人との交接

子曰吾未見剛者或對曰申張子曰

糸貞食言
張ハ慾ナリ馬
ゾ剛ト得人
未ニ至ヨハナリ

子貢曰く我人之
諸を我に加るを
欲せず吾も亦諸
を人に加るを
欲せず子曰
然りと欲する子曰
賜再の及
所非也

張也慾焉得剛

剛ハてつとて操行正
志をなすめとて

未見ど好
申張一を剛者とりありのなりん人御答申張慾
好むのなり馬は剛といふことを得人や慾とハてつとて
かゝる守る事あるハと

○子貢曰我不欲人之加諸我也吾亦
欲無加諸人子曰賜也非爾所及也

此段子貢仁の工夫あつて凡そ人より我身を加ふる
事のころは不欲とあつてハ吾より人へ加ふる事の
毎人と存するよりハ之を聖人仰ふそれハ及
とてハあつて中庸の書ふとてハ我身分

事とて及ぶ事ハ是ハやまとあつてハ必人への
事を及ぶ事ハ是ハやまとあつてハ必人への
以て人へも及ぶ事ハ是ハやまとあつてハ必人への
を廣く推及して愛する事ハ是ハやまとあつてハ必人への
所ハ子貢の及ぶ

○子貢曰夫子之文章可得而聞也夫
子之言性與天道不可得而聞也

子貢曰く夫子之
文章ハ得て聞可
夫子之性ハ天道
與之言ハ得
て聞可ハ不

子貢の平生見受奉るを述ぶ夫子の身に及ぶ
の如く御徳の文章ハ人々に見聞奉る事ハ
性ハ人の生る始より受ける天の理の定まる事ハ
天道ハ自然と天の運數ありて人の自由
事ありとの事ハ知者もろろはあつて口説く
常の人ハ之を聞て
惑を生まるゆへなり

子路聞之有未之能行未唯聞之有恐

子貢問曰孔文子何謂之文子曰敏而好學不耻下問是以謂之文也

○子路有聞未之能行唯恐有聞

御人子路ハ義理を尊び行ひ進む故御人

○子貢問曰孔文子何以謂之文也子

曰敏而好學不耻下問是以謂之文也

此段衛の國は孔圍といふあり然る人より尊んで孔文子

是謂之文也

○子謂子產有君子之道四焉其行已

也恭其事上也敬其養民也惠其使民

也義

也

也

○子曰晏平仲善與人交久而敬之

晏平仲ハ序ふ出たり聖人をさへて晏女嬰の事なり

子曰臧文仲居蔡山節藻稅何如

知中知者世上下の氣ふやう易く魯の臧文仲と云ふ人なりと云ふなり

子張問曰令尹子文三仕三已而無愠色

○子張問曰令尹子文三仕三已爲令尹無

以新令尹之告何如子曰忠矣

告新令尹何如子曰忠矣曰仁矣乎曰

崔子齊之君也殺陳文子馬十乘有棄之

崔子弑齊君陳文子有馬十乘棄而違

違他邦^{（違）}至^{（至）}則^{（則）}
曰^{（曰）}吾大夫崔
子^{（子）}猶^{（猶）}之^{（之）}
違一邦^{（違）}之^{（之）}則^{（則）}
又曰^{（又）}吾大夫
崔子^{（崔子）}猶^{（猶）}之^{（之）}
違何如^{（違何如）}子曰^{（子曰）}
清^{（清）}曰^{（曰）}仁^{（仁）}乎^{（乎）}
曰^{（曰）}未知^{（未知）}焉^{（焉）}
也^{（也）}仁^{（仁）}得^{（得）}ん

之^{（之）}至於^{（至於）}他邦^{（他邦）}則^{（則）}曰^{（曰）}猶^{（猶）}吾大夫崔子^{（崔子）}也^{（也）}違
之^{（之）}之一邦^{（一邦）}則^{（則）}又曰^{（又）}猶^{（猶）}吾大夫崔子^{（崔子）}也^{（也）}違
之^{（之）}何如^{（何如）}子曰^{（子曰）}清^{（清）}矣^{（矣）}曰^{（曰）}仁^{（仁）}矣^{（矣）}乎^{（乎）}曰^{（曰）}未知^{（未知）}焉^{（焉）}
得^{（得）}仁^{（仁）}崔子^{（崔子）}之^{（之）}齊^{（齊）}の大夫^{（大夫）}なり^{（なり）}齊^{（齊）}の君^{（君）}元^{（元）}より^{（より）}不^{（不）}徳^{（徳）}なる^{（なる）}に
よ^{（よ）}不^{（不）}義^{（義）}を^{（を）}な^{（な）}り^{（り）}つ^{（つ）}の^{（の）}崔^{（崔）}子^{（子）}が^{（が）}為^{（為）}る^{（る）}義^{（義）}を^{（を）}か^{（か）}ひ^{（ひ）}陳^{（陳）}文^{（文）}子^{（子）}
も^{（も）}や^{（や）}大^{（大）}夫^{（夫）}なり^{（なり）}文^{（文）}子^{（子）}此^{（此）}有^{（有）}る^{（る）}を^{（を）}見^{（見）}て^{（て）}餘^{（餘）}は^{（は）}見^{（見）}苦^{（苦）}く
汚^{（汚）}ら^{（ら）}へ^{（へ）}く^{（く）}や^{（や）}て^{（て）}馬^{（馬）}十^{（十）}乘^{（乗）}を^{（を）}持^{（持）}て^{（て）}家^{（家）}を^{（を）}な^{（な）}る^{（る）}も^{（も）}官^{（官）}録^{（録）}
を^{（を）}こ^{（こ）}上^{（上）}て^{（て）}齊^{（齊）}の國^{（國）}を^{（を）}立^{（立）}て^{（て）}他^{（他）}國^{（國）}へ^{（へ）}至^{（至）}る^{（る）}に^{（に）}兼^{（兼）}て^{（て）}名^{（名）}の
あ^{（あ）}る^{（る）}文^{（文）}子^{（子）}は^{（は）}重^{（重）}く^{（く）}抱^{（抱）}ら^{（ら）}る^{（る）}に^{（に）}不^{（不）}仕^{（仕）}合^{（合）}なり^{（なり）}人^{（人）}
吾^{（吾）}國^{（國）}の^{（の）}崔^{（崔）}子^{（子）}が^{（が）}猶^{（猶）}は^{（は）}あ^{（あ）}り^{（り）}と^{（と）}小^{（小）}逢^{（逢）}て^{（て）}官^{（官）}録^{（録）}を^{（を）}捨^{（捨）}
て^{（て）}去^{（去）}る^{（る）}一^{（一）}邦^{（邦）}は^{（は）}至^{（至）}る^{（る）}に^{（に）}同^{（同）}じ^{（じ）}や^{（や）}あ^{（あ）}る^{（る）}以上^{（以上）}
三^{（三）}度^{（度）}も^{（も）}一^{（一）}邦^{（邦）}を^{（を）}舉^{（舉）}動^{（動）}と^{（と）}な^{（な）}る^{（る）}は^{（は）}何^{（何）}の^{（の）}御^{（御）}咎^{（咎）}も^{（も）}
な^{（な）}ら^{（ら）}ず^{（ず）}官^{（官）}録^{（録）}を^{（を）}實^{（實）}と^{（と）}し^{（し）}て^{（て）}欲^{（欲）}は^{（は）}る^{（る）}は^{（は）}清^{（清）}矣^{（矣）}人^{（人）}なり^{（なり）}と
ぞ^{（ぞ）}と^{（と）}問^{（問）}て^{（て）}曰^{（曰）}く^{（く）}仁^{（仁）}なり^{（なり）}や^{（や）}答^{（答）}て^{（て）}曰^{（曰）}く^{（く）}臣^{（臣）}と^{（と）}て^{（て）}仇^{（仇）}を^{（を）}

季^{（季）}文^{（文）}子^{（子）}三^{（三）}思^{（思）}て^{（て）}
而^{（而）}後^{（後）}行^{（行）}る^{（る）}は^{（は）}
子^{（子）}之^{（之）}を^{（を）}聞^{（聞）}て^{（て）}曰^{（曰）}く^{（く）}
再^{（再）}斯^{（斯）}可^{（可）}矣^{（矣）}

○季^{（季）}文^{（文）}子^{（子）}三^{（三）}思^{（思）}て^{（て）}而^{（而）}後^{（後）}行^{（行）}る^{（る）}子^{（子）}聞^{（聞）}之^{（之）}曰^{（曰）}再^{（再）}斯^{（斯）}
可^{（可）}矣^{（矣）}季^{（季）}文^{（文）}子^{（子）}ハ^{（ハ）}魯^{（魯）}の^{（の）}大^{（大）}夫^{（夫）}なり^{（なり）}生^{（生）}付^{（付）}て^{（て）}何^{（何）}事^{（事）}も^{（も）}
物^{（物）}よ^{（よ）}れ^{（れ）}ん^{（ん）}を^{（を）}入^{（入）}る^{（る）}は^{（は）}事^{（事）}々^{（々）}と^{（と）}し^{（し）}て^{（て）}心^{（心）}を^{（を）}潔^{（潔）}く^{（く）}
し^{（し）}て^{（て）}廉^{（廉）}略^{（略）}な^{（な）}る^{（る）}二^{（二）}度^{（度）}も^{（も）}い^{（い）}へ^{（へ）}と^{（と）}念^{（念）}入^{（入）}て^{（て）}三^{（三）}度^{（度）}ハ^{（ハ）}
疑^{（疑）}て^{（て）}物^{（物）}の^{（の）}理^{（理）}ハ^{（ハ）}再^{（再）}び^{（び）}し^{（し）}て^{（て）}可^{（可）}し^{（し）}と^{（と）}仰^{（仰）}め^{（め）}し^{（し）}

季^{（季）}武^{（武）}子^{（子）}邦^{（邦）}道^{（道）}有^{（有）}る^{（る）}
則^{（則）}ち^{（ち）}知^{（知）}る^{（る）}邦^{（邦）}道^{（道）}
無^{（無）}ハ^{（ハ）}則^{（則）}ち^{（ち）}愚^{（愚）}る^{（る）}
其^{（其）}知^{（知）}ハ^{（ハ）}及^{（及）}可^{（可）}か^{（か）}う^{（う）}
其^{（其）}愚^{（愚）}ハ^{（ハ）}及^{（及）}可^{（可）}か^{（か）}う^{（う）}
不^{（不）}也^{（也）}

○子^{（子）}曰^{（曰）}季^{（季）}武^{（武）}子^{（子）}邦^{（邦）}道^{（道）}有^{（有）}る^{（る）}則^{（則）}ち^{（ち）}知^{（知）}る^{（る）}邦^{（邦）}無^{（無）}道^{（道）}則^{（則）}ち^{（ち）}愚^{（愚）}る^{（る）}
其^{（其）}知^{（知）}可^{（可）}及^{（及）}也^{（也）}其^{（其）}愚^{（愚）}不^{（不）}可^{（可）}及^{（及）}也^{（也）}
季^{（季）}武^{（武）}子^{（子）}を^{（を）}稱^{（稱）}ひ^{（ひ）}て^{（て）}世^{（世）}の^{（の）}風^{（風）}を^{（を）}悟^{（悟）}て^{（て）}身^{（身）}を^{（を）}
苦^{（苦）}勞^{（勞）}の^{（の）}場^{（場）}に^{（に）}置^{（置）}か^{（か）}る^{（る）}人^{（人）}なり^{（なり）}と^{（と）}し^{（し）}て^{（て）}邦^{（邦）}明^{（明）}る^{（る）}道^{（道）}有^{（有）}る^{（る）}
知^{（知）}者^{（者）}賢^{（賢）}人^{（人）}ハ^{（ハ）}用^{（用）}ひ^{（ひ）}ら^{（ら）}る^{（る）}に^{（に）}邦^{（邦）}は^{（は）}道^{（道）}無^{（無）}時^{（時）}ハ^{（ハ）}知^{（知）}あ^{（あ）}る^{（る）}者^{（者）}ハ^{（ハ）}惡^{（惡）}
し^{（し）}と^{（と）}し^{（し）}て^{（て）}却^{（却）}愚^{（愚）}な^{（な）}る^{（る）}者^{（者）}ハ^{（ハ）}身^{（身）}ハ^{（ハ）}害^{（害）}な^{（な）}る^{（る）}に^{（に）}然^{（然）}る^{（る）}季^{（季）}武^{（武）}子^{（子）}

子陳ちん在あて曰いく

歸與きよ歸與きよ吾黨

之小子のせうし狂簡きやうかんに

斐然ひぜんとて章しやうと

成之なりと裁さいと

所以ゆゑと知不しらず

へ智を自由ゆゑ用ひ人なり邦は道ある時ハ智者
なりと用ひらる邦は道なき時ハ愚なりと人を見え
場所ハ及ばぬとなくと言ふのハ

○子在陳曰歸與歸與吾黨之小子

狂簡斐然成章不知所以裁之

此義ハ聖人諸國へ御周流ありて此時陳の國に在
り故郷に歸んとせしめし語なりと云ふ歸與を

歸與とてそのハ子細ハ吾小子の黨にひて學問は進
志大なり者ハ定めて狂簡に社あり人多くハ

斐然文章風流のを成て樂學術の

裁とて所以と知さるるハ

○子曰伯夷叔齊不念舊惡怨是用希

伯夷と叔齊ハ兄弟とて徳高く孤竹城の君の子
なりその人柄とて舊はあり人の惡事ハ念は

不念とて更なるハ希なり是れ用

○子曰孰謂微生高直或乞醢焉乞諸

其鄰而與之微生高と正直なりと云ふ者も

名を奉る者ハ道なきハ外大道の害となさ

ゆハ已とて得るハ詳ふ弁のあり先達或人

醢を乞ふ來る者ハ内金を乞ふ其鄰に乞

乞來る者ハ吾内金を乞ふ其鄰に乞

金ハ金とて正直なり聖人其介の場所ハ

介て其善惡を見ゆ人ハ謹

つ事を重きとての所也示る

○子曰巧言令色足恭左丘明恥之丘

亦恥之匿怨而友其人左丘明恥之丘

孰しやく謂い微生高を直

と云ふ者も

乞い諸しよ其鄰に

乞いて而して之を

與よ諸しよ而して焉を

巧言令色足恭

左丘明恥之

丘亦恥之

匿怨而友其人

左丘明恥之

丘亦恥之

左丘明恥之

顏淵 李路侍子

三
益冬再

志言蓋二

子路曰願^{かん}く^くか^か車^や

馬輕裘衣朋友與

共
之
散

憾
無
之
其
情
乃

顏淵曰願

金に代て無之

愛と施はとも
無う

言を巧ふして諂ひ顔色をも令て敬慕の至る
甚るる者なりと左丘明といふ人馳

こととに思ひ
 の内は悪と嫌て上向げう
 事も左丘明とせし由我も
 同やうなうと聖人自らの

折^マり 顔淵^{げんげん}と季路^{きじろ}と御傍^{ごぼう}に在^ありし聖人^{せいじん}仰^{おほ}りて
 盡^{ことごと}き其^{その}名の再^{また}志^しを言^い述^のべてゐるべしとて

子路曰願車馬衣輕裘與朋友共敝之

而無憾
子路の御為人善を好む義理に進方なり
たとふその気象学問に相交る朋友にふ

車馬並に衣類、くしくハ輕き孤の裘、くしくくしく衣類等
の物をかゝて、吾物と思ひて或ハ之を敝ア、又ハ

うゝみふきどーそも 必しも憾と
うろくくとハ有まじとそ

顏淵曰願無

願淵自己の願ふハ吾たよるべから
ちるよちしき事となまとも或ハ

いふ事ことの勝かち事こと身みありあつとも夫そを伐は心こころなりとの
なき事ことふと少すくくも伐はぬを第だい一いちと人ひとのさうは

是ハ心勞こころうなりとやあやうあやうなることハまだやうやうといふ度
死しや不仁ふじんがことハ露つゆ路ぢちぢも人ひとの施せちぢりきこと

終に聖人の御志を

承^{うけ}の^り人^{ひと}と^の子^こ路^ろの^り同^{おな}なり

子曰老者安之朋友信之少者懷之

聖人の意思ハ吾常ニ天下の老て衰々者ニ求メ
 ても苦勞ナクとも事の金ナクとも心ナクとも

ゆゑ平生付合老人のハハも吾の安心をさやうと云ふこと
すく廣く朋友のハハ約束違ふと實なることを以て先より

も吾^{われ}ふ信^{しん}を以て文^{ふみ}をうふありとてかう又常^{とこ}ふ天下
の万民^{ばんみん}を撫^{なで}安^{やす}しとてを抱^{かか}くその故^{ゆゑ}は平生^{へいぜい}年^{ねん}

子路曰く願くハ子
之志ざりと聞
子曰まはく老者ハ
之を安ト朋友ハ
之を信ト少者ハ
之と懷ん

己なりへ乎吾未
能其過まら見
て内自訟
者と見未

十室之邑必忠
信丘如者有
丘之学を好む
如不

論語卷之終

少と者も愛し吾へもよく懐と相親むと云ふ
と云ふ程子先生の仰ふ聖人の心ハ天地の万物を生
育する氣象なりと
○子曰己矣乎吾未見

能見其過而内自訟者也
此段の意ハ人の
為人と云ふハ

見ざる己矣乎と恐る子細ハ若身過
事あるに吾と吾心の内ハ其宜う不をよ見付心を留
て自ら心と訟て磨
○子曰十室之邑必有

忠信如丘者焉不如丘之好學也

免くハ學問を好む事道と學べハ大徳とも
至るべし我を生なりと知るべく中くさあ
たとへば十室の邑ありある小邑も忠信なりと我にま
人も有べし我如く學んで倦むの學問を務るハ如人
ある事と示し聖人も必と學を好む
いふ事を示し聖人の御名也



